

# 斎藤茂吉が寺田寅彦の死を悼んで詠んだ歌

大森 一彦

斎藤茂吉の第四歌集『暁紅』（岩波書店、1940）の中に、「憶寺田博士」の詞書をもつ寺田寅彦の死を悼んで詠んだ歌が、5首収められている（註）。まずそれを掲げる。

（註）初出：アララギ、29巻2号、1936.2. p.2. [1]～[3]の3首のみ掲載されており、他の2首は見えない。

憶寺田博士

- [1] 舗装道路ととのひしより深川の地沈(つちしづ)むといひし君しおもほゆ
- [2] のみ食ひのあけくれに君のみとめたる「人生物理」をいまはおもはむ
- [3] 西方(さいほう)のくにの人らはあかき月見向(みむ)きもせずといひしことあり
- [4] 教授にてその學風をあざやかにしたまへること記(しる)しおかむぞ
- [5] 十數年過去にならむか吾が歌集を悲劇的なりと云ひたまひけり

この作品は、傑出した二人の文科学者の奥深い交流の遺珠であり、寅彦を思慕する読者には懐しい感慨である。しかし、歌意はいずれも難解である。「君しおもほゆ」、「云ひたまひけり」等の結句は、寅彦に寄せる敬慕と感銘を現したものであるが、それへ導く上の句が、いかなる実相を指すものであるかが分らない。茂吉自作自注の「作歌四十年」にも言及はない。これを解釈し、鑑賞した先行文献を求めて探索を試みたが、調べがつかない。本稿は、題材や背景、モチーフにつき、文献調査に基づき私見を述べたものであり、大方のご批判、ご教示を請うものである。

## [1] 舗装道路ととのひしより深川の地沈(つちしづ)むといひし君しおもほゆ

「深川の地沈む」。寅彦に、「地面の上がり下がり」と題するローマ字書きの解説論文がある(ローマ字世界、5巻7号、1915.7. p.3～6)。前半では、地面の運動と高さの概念を平明に解説し、後半では、陸地測量部の水準測量により明らかになった東京近辺の、著しい地盤沈下の様子を紹介している。今後の長期的な沈下の予測にふれ、「もしこの割合で、いつまでも沈んで行けば、深川あたりは、200年の後には、1m程も下がるわけであるが、あまり遠い先の事はまだ何とも言えない」と述べている。「深川の地沈む」とは、この現象を指すものと推定する。

「舗装道路ととのひしより」。地盤沈下の原因について、先の寅彦論文ではふれるところはないが、

都市の舗装道路の整備が関連あるとする説の出典を求めて調べたところ、1935年頃のこととして、「(地盤沈下の原因としてはその後種々の説がでましたが、定説はありませんでした。宮部先生も道路の舗装の増加などいろいろ原因を模索をしておられました」という記述を含む文献を見つけた(広野卓造. 地盤沈下の研究と和達博士. 測候時報. 63巻1号. 1995.1. p. 29~32). 文中の「宮部先生」とは、地震研究所の宮部直巳(1901-1973)であり、また、論文タイトルにある「和達博士」は、中央気象台の和達清夫(1902-1995)である。ともに寅彦門下の地球物理学者として知られ、寅彦の読者にはおなじみの名前である。この説の情報源は宮部にあることが分かったので、確かな情報を求めて、宮部のこの分野の一系の論文(「地震研究所彙報」掲載)にあたってみたが、それらしい記述は見当らなかった。また彼の著書『地盤の沈下』(河出書房. 1941)を読んで見たが、出ていなかった。してみると、この説は、一時期少数の研究者間で共有されていた、いわゆる萌芽的段階の仮説のひとつだったと思われる。なにしろ寅彦は、(日本で最初に地盤沈下を発見した人)と呼ばれている人だ(尾林達成. 測量. 31巻4号. 1981.4. p. 29~31). 寅彦は、最前線のオリジナルな研究の一端を茂吉に語って聞かせた訳であり、茂吉はまたそれを、正確にこの一首に定着し記録した—ということになるだろう。

## [2] のみ食ひのあけくれに君のみとめたる「人生物理」をいまはおもはむ

「君のみとめたる「人生物理」」。この歌のキーワード「人生物理」とは聞き慣れない言葉である。カギかっこつきだから、まぎれもなく寅彦が主唱し、茂吉が共感したある種の人生哲学のようなものであろう。茂吉が受けとめたものを、あれこれ憶測してみるには限界がある。むしろ、そこに包含しようとした寅彦の思想を、彼のテキストにより確認したいのだが、思いあたる作品はない。寅彦の全著作物の中の要語を、分析的横断的に検索出来る索引があればよいのだが、そういうレファレンスツールはなく、誰も試みていない。

## [3] 西方(さいほう)のくにの人らはあかき月見向(みむ)きもせずといひしことあり

「西方のくにの人らはあかき月見向きもせず」。岩波書店の雑誌「文学」が企画した座談会(1935年7月4日開催)におけるある発言が、この一首に投影しているものと推測される。テーマは「日本文学に於ける和歌俳句の不滅性」というもので、出席者は、寅彦、茂吉、のほか幸田露伴、和辻哲郎等全7名、錚々たる顔ぶれであった(『写真でみる岩波書店80年』1993. p. 61. にその時の集合写真が掲載されている)。会が始って間もなく、こんなやりとりがあった。

.....  
**幸田** あの、月を賞美すると云ふことはですね、どうも支那日本が割に強くはないですか。

**和辻** さうだと思ひます。独逸辺りの月は實際良くないのです。

**幸田** 月が良くないとは…。

**和辻** 位置が大変低いのです。緯度が高いせゐですか、どうも月が南の空の低いところを通過して行きます。名月の時分にチャガルデンへ月見に行ったことがあります。どうしたのか月が見えない。よくよく探して見ると、月が空に低く斜にかかっているものですから、樹の蔭に隠れて見えないのです。樹の梢にかかるなどといふことはない。(中略) 山の上なんかでも同じですね。どうもあまり感じがありません。

**幸田** それぢや向うの人は月を見て居ないといふ訳ですか。

**和辻** まあ、さうです。(中略) 偶に詩人が居て何処かで見るかも知れませぬが、普通の人は月見はしないと思ひます。

.....  
■文学. 3 卷 9 号. 1935. 9. p. 102~125.

この記録によると、問題の発言者は、寅彦ではなく和辻のようであり、一座の雰囲気からか、茂吉は人違いをした可能性がある。もっとも、これとは別の機会に、二人がこの件を話題にした可能性もなしとしないが、茂吉・寅彦が同席した座談会の類いは、これ以外には知られていない。

#### [4] 教授にてその學風をあざやかにしたまへること記(する)しおかむぞ

「その学風」。茂吉は、(物理学者寺田寅彦)の学風をどういふものだと理解していたのだろうか。また、それをどこで知ったのであろうか。推定されるひとつの機会に、彼が参列した寅彦の告別式(茂吉日記. 1936. 1. 6. 全集. v. 30. 岩波. 1974. p. 556)において、ある弔辞を聞いたことにあると思われる。彼は、「寺田博士」と題する追悼文を書いているが(思想. 寺田寅彦追悼号. 1936. 3. p. 290~293)、その中で、「博士が偉い学者であったことは、実は葬儀のときその輪廓が辛うじて分つたほどで、私は黙つてゐたが、寺田研究所などといふものの存在もそのとき初めて知つたほどである。…葬式の日門下生の方が、博士がタドンの燃える過程にまで注意せられたことを云はれたが、これも単純なインファル[着想]として片付けてしまふものではない」と記している。[註：下線部はママ。黙つて聞いてゐたが、…の意か]。

告別式で捧げられた弔辞のうち、「門弟総代」として読まれた弔辞は、藤原咲平(1884~1950)によるものだが、幸い今でも容易に参照することが出来る。その中に次のような条りがある。「先生はまた、たどんの燃え方だとか、さゞげ豆の模様だとか、墨流しだとか、普通の物理学にない様な問題でも、ほんとに真面目に御検討になりました。其御態度は、実に神聖其ものの感じであります。先生の御研究は、勿論名利や俗論に煩はされず、さりとて独断を警戒し、綿密な思索と、嚴重な実験とを続けら

れるのでした。それ故、最初一見無価値の様な研究からも、遂には大きな結果が生まれます。…」(小林勇編。回想の寺田寅彦。岩波書店。1937。p. 275～279。句読点は大森が付与)。

茂吉が追悼文に書きとめた情報の典拠は、これであろう。彼が耳を傾けた、「普通の物理学にない様な問題」を取り上げたとされる寅彦の学風は、世上〈寺田物理学〉と呼ばれているものであるが、これがよほど印象深く受けとめられたに違いない。この一首に詠われた「あざやかにしたまえる」「その学風」の具体的な実相は、こういったものであったと推測して間違いはあるまい。

なお、「たどんの燃え方」は、理化学研究所寺田研究室の渡辺慧(1910～1993)が行った研究である(理研彙報。12 輯 11 号。1933. 11. p. 887～888)。ついでながら、「さゝげ豆の模様」は、正しくは、「うずら豆の模様」であり、同じく理研寺田研究室の平田森三(1906～1966)の研究である(理研欧文報告。26 巻 553 号。1935. 2. p. 122～135)。それぞれ単著だから、寅彦の論文目録には出ていない。「墨流し」の研究は、寅彦と山本・渡部両助手との共著論文で、〈寺田寅彦学術論文目録〉の、No. 188, 202(1934, 1935)に記載されている欧文の 2 篇である。

#### [5] 十数年過去にならむか吾が歌集を悲劇的なりと云ひたまひけり

「吾が歌集」。寅彦は、茂吉の第二歌集『あらたま』(春陽堂。1921)の書評を書いている。歌誌「アララギ」の小特集“歌集『あらたま』批評集”のために求められ、寄稿した作品で、その文中に〈悲劇的〉という言葉が 2 回出て来る。以下にその部分を抄出する。

「此歌集の底を流れて居る気分の中には何かしら悲劇的要素がある。それは必ずしも直接さういふ題目を取り扱った歌の効果が周囲の歌に瀰散する為ばかりとは思はれない。却って極めて無事な生活を詠じたるものの中にそんな気のするものがある」。

『あらたま』には何かしら特別な重い悲劇的なモーメントの暗示があつて、どうかすると、突然吾が門をたたく運命のおとずれのやうなものを思はせる」。

■寺田藪柑子。『あらたま』雑感。アララギ。14 巻 10 号。1921. 10. p. 81～86.

寅彦がいみじくも指摘したこの言葉は、茂吉のゆれ動く内面の核心を衝いたに違いない。それは「十数年過去」のことではあったが、忘れ難い評言として、寅彦の死に際して想起されたものであろう。